



倉沢愛子、『インドネシア大虐殺——二つのクーデターと史上最大級の惨劇』（中公新書）中央公論新社，2020，iv+222p.

倉沢愛子、『楽園の島と忘れられたジェノサイド——バリに眠る狂気の記憶をめぐって』千倉書房，2020，xxiii+258p.

1965年9月30日深夜から翌日未明にかけて、スカルノ大統領の親衛隊兵士たちがインドネシア国軍の7人の将軍の自宅に押し入り、6人を殺害した。首都ジャカルタで起こったこの出来事は「9月30日事件 Gerakan 30 September」，略称G30Sと呼ばれている。本書評で取り上げるのは、G30Sを契機として生じた劇的な政変とインドネシア共産党（以下PKI）関係者などの大虐殺の真相に迫ろうとする上記2冊（以下『虐殺』及び『楽園』と表記）である。

著者は既に『9・30世界を震撼させた日』（以下『震撼』）を出版している。これら3冊の本には、このテーマを「人生最後の大きな課題」とする著者の熱意が込められている。この熱意は、歴史を掘り起こすという学術的動機に加え、大虐殺と同時代を生き、大虐殺をジェネシスとするスハルト政権下におけるインドネシアへの経済進出によって潤った日本に生きてきたにもかかわらず、大虐殺を知る努力を怠ってきたという、道義的自責に支えられている。

『震撼』同様、この2冊はともに、大統領の交代史を構成の背骨にしている。反新植民主義を掲げたスカルノ政権が、PKIや共産国に親和性を高め、西側諸国との対立を深めていったG30Sの歴史から説き起こす。G30Sの経緯、インドネシア全土にひろがったPKI関係者などの虐殺。国際社会の黙認。1966年3月に起きた第二のクーデターを契機とする、スハルトによる大統領権限の実質的奪取とスカルノ大統領の排除。その後2年間かけて行われた、スハルト大統領正式就任と抑圧的「新政治体制」への着実な移行。32年間の反共開発独裁スハルト政権とPKI関係者の抑圧。「民主化」を

求める「市民」の抗議のなかのスハルト体制の終焉。3冊いずれにおいても最終章で、スハルト体制崩壊後に選出された大統領たちの政権について、G30Sとその後の大虐殺との関係から触れ、大虐殺に関する調査や歴史の語りなおしは十分になされていないと指摘している。以上のような共通の骨組みを取りながらも、それぞれの著書の重心と書き方は大きく異なっている。

『虐殺』は、大虐殺に関する記述が少なく、一般読者にとって馴染のある国際機関、諸国家、有名人物を主語にする史的記述が多く、それがノンフィクションのような相貌を呈しているなど、『楽園』より「軽微」¹⁾な内容になっている。『震撼』を一般読者向けに書き直した部分も多いが、この事件を国際的動態へと繋ぐ、『震撼』にはない記述も少なくない。また、歴史的推移のなかでの日本の振る舞いに紙幅を割き、大統領交代にまつわるスカルノ大統領とデヴィ夫人の愛情物語を盛り込んで、一般読者の関心を惹きつけると同時に、この大虐殺が読者にもかかわる問題であることを感じさせる効果をもたらしている。

本書は、権力と利権とイデオロギーをめぐる諸国家と高地位者たちの歴史／物語を多く含むが、名もなき人たちの人生の物語も掲載し、読者が事件の被害者の「生の声」に触れることで、悲劇をリアルに感じることを意図している。掲載されている被害者の「生の声」は、PKIメンバーの国内での長い逃亡生活と現在の慎ましい暮らしにいたるまでの半生の語りである。その他に掲載されている「生の声」は、殺害する側にあった民間人二人による語りである。当初から、PKI関係者の殺害は祖国を守る英雄的行為であると、殺害にあたった多くの人たちの間で考えられており、1973年には、その時の殺害はおとがめなしと公式に位

1) インドネシア研究懇話会「【インタビュー：先達・先輩と語る】倉沢愛子さんに聞く 9・30事件をめぐる作品に込めた思い、そしてこれから（上）」<https://kapal-indonesia-jepang.net/kontribusi/wawancara/kurasawa930a/>。2020年10月4日公開（2021年4月19日閲覧）、同「（下）」<https://kapal-indonesia-jepang.net/kontribusi/wawancara/kurasawa930b/>。2020年10月11日公開（2021年4月19日閲覧）

置付けられた。1998年スハルト政権終焉を契機に始まった民主化によりPKI関係者は法的に政治犯ではなくなったが、その一方で、現在でも自らの手によるPKI関係者の殺害を正義の武勇伝として語る人は多い。にもかかわらず、著者が選んだ「生の声」は、被害者の動揺や逡巡がにじみ出た語りである。著者によるこの選択は、『虐殺』が明らかにする、以下のような「真相」と呼応している。

虐殺動機や推進の真相として、文化的、宗教的、政治経済的理由付けやアモック（抑圧された怒りが突如狂乱の暴力として噴き出す、東南アジア島嶼部に見られる現象）などがしばしば挙げられるが、いずれも、かくも大規模な殺戮を説明できないと著者は判断し、以下の2点を「真相」としている。一つは、PKIへの嫌悪と恐怖やPKI関係者と見なされて殺される恐怖を煽る、「フェイクニュース」を含めた情報操作。もう一つは、国際社会や諸外国がこの虐殺に沈黙したことである。

このようにして、著者は、名もなき人たちが諸国家の関係や国家権力、それらの歴史的変容に翻弄されたことを浮かび上がらせる。終盤では、PKI関係者であったがために、祖国から切り離されて海外で逃亡生活を送ってきた人々の軌跡を追った後、虐殺が最も激しかったバリでさえも虐殺の地に慰霊碑一つたてられず、事件は風化しつつあると終章を結んでいる。著者は、海外逃亡者を主題にした本を準備しつつあるとのことだが、²⁾『虐殺』は、その4冊目の本への道を照らし、バリの大量虐殺を主題とする『楽園』へと誘っている。

『楽園』は、日本人も享受している観光商品としてのバリの穏やかさとバリ人の日常生活の穏やかさに覆い隠された虐殺事件の真相を明らかにすることを目的としている。虐殺の酷かったジェンブラナ県に焦点をあて、公文書、伝記、手記、研究書を含む文献だけでなく、同県の虐殺諸事件の関係者計51名に対して著者自身が行った聞き取りを資料としている。

「はじめに」で、G30S前史と、本書の動機と現地での協力者たちの紹介の後、第1章では、ジャワとは大きく異なるバリの近代史を、虐殺の火種

となりうる対立に着目して概説する。独立後、スカルノ政権に対するバリ島内の親疎度は様々であった。1959年、バリ州議会はPNI（インドネシア国民党）の州知事を選んだが、スカルノ大統領はそれを無視して親スカルノ・親PKIであった、ジェンブラナ王の息子ステジャを選出した。これを機に、バリにおけるPNIとPKI間の対立が顕著になったと指摘される。

第2章の焦点は、狭い海峡を挟んで東ジャワと繋がっているジェンブラナ県のG30S前史である。同県は、バリ島内で、ムスリムの人口比が最も高く、G30S前夜の同県の政党勢力関係が、バリ平均よりもジャワに近かったことが示唆される。当時の県内における、PKIとPNIの大衆動員、農地改革や新田開発をめぐる紛争と両政党の応酬、1963年から始まった島東部の聖山の噴火に伴う不安、奇病による牛の大量死による不安などを、虐殺への序奏として取り上げている。州知事ステジャに加え、県内の虐殺に影響を与えた主要人物たち（王の甥であるPKI県支部長、PNI県支部長、政党無所属の県知事ドースター）を登場させている。これ以降、ドースターの伝記に記された彼の語り³⁾が、中立的な現場の声としてしばしば引用される。

第3章は同県のムスリムの概要を記述する。オランダによる攻撃を受け、17世紀にマカッサルから、18世紀には西カリマンタンから、それぞれブギス人とマレー人の王族一族が同県に移住した。その後、ジャワ島などからもムスリムが移住したが、1965年の虐殺が起きるまでは、ムスリムとヒンドゥーの人たちは相互に尊重し合いながら住み分けをしていた。1963年に、同県のNU（1926年に東部ジャワでイスラム学者を中心に結成された比較的穏健で保守的なイスラム組織。当時は政党でもあった。）の青年組織アンソールが再建された。それまで組織に無縁で、イスラムへの関心も低かった、21歳のアドナンが幹部に選ばれた。同県のアンソールは、組織的にはバリに包含されるが、実際的には東ジャワのムスリムと近い関係にあったと指摘される。これ以降、アドナンの未刊の手記が、現場の生の声として頻繁に引用される。

第4章は同県での虐殺連鎖の発端となった事件の真相を明らかにしようとする。11月30日ジェン

2) 前掲ウェブサイト。

ブラナ県では、PKIの勢力の強いテガル・バデン村で殺害事件が起こった。通説は、その村でのPKI集会を解散させるために、同県駐屯国軍兵士とアンソール成員からなる部隊が現地に行ったところ、PKI成員によって兵士1人と、アンソール成員2人が殺害されたため、国軍兵士やアンソール成員は、盟友を殺された正当な怒りに突き動かされ、正当な報復として虐殺を繰り返したとする。掲載されている9人の証言は様々であり、証言内容は、大きく食い違っており、いずれも通説に疑問を投げかける。それとは対照的に、アドナンの手記の記述は、あまりに整然と通説に適合しているが故に、通説に疑問を投げかけると著者は位置付ける。

第5章は、この事件を引き金として次々と起こった、狂乱の様相を呈する一連の虐殺や死体の残酷な取り扱いについての記述や証言を掲載してゆく。出典は、アドナンの手記、郷土史家の未刊の手記、その手記を参考にフィールドワークを行った同県出身の文化人類学者の著書、ドースター県知事伝記、ステジャ州知事伝記、バリ人の論文、虐殺の執行や死体の残酷な取り扱いを直接経験見聞した14人の語りである。

第6章は、テガル・バデン事件とそれ以降の虐殺は、国軍側が情報や事実をでっち上げて、民間人を挑発した結果であった、という著者の仮説の妥当性を示すために、10程度の状況証拠——例えば、兵士とアンソール成員が殺され、検死されず埋葬され、大量虐殺が正当な報復としてなされたという事態推移の迅速さには、準備されていたのではないかという不審を懐かざるを得ない——を積み上げていく。

第7章は、「ひとは人を斯くも簡単に殺せるものなのか」という問いに、「何が彼らをそうさせたのか」という問いを補完して、直接かかわった人たちの聞き取りなどから答えようとしている。著者が会った虐殺者たちは、PKI関係者に対する「制裁」を誇らしく語ったが、著者は、彼らは例外的であり多くの人たちは悔いをもって生きてきたのではないかと推測し、誇りに満ちた語りのなかにも「奥深い苦悩」を読み取る。

殺人を可能にした仕掛けとして、PKI, PNI, アン

ソール等という名称による全国標準の「カテゴリー化」、殺害者集団の国軍による「組織化」、被殺害者を「割り当てjajah」というインドネシア語で示す「形式化」など、「合理化」の諸例を紹介している。民間に潜在する疑心暗鬼と、国家中央からの「合理化」と荒ぶる権力の後ろ盾は、人々を「死刑執行人」へと変容させ、虐殺へと駆り立てたと、著者は示唆しているように思われる。また著者は、宗教呪術的=非合理的実践が虐殺を促したと示唆している。

PKIへの帰属は大抵、イデオロギーとは無関係に、各自の社会的ネットワークに従って決まった。同時に、政党加入原理は、地縁や血縁などの関係性原理、親族や共同体などの集団化原理とは独立的に作用するため、PKIであるか否かの線引きが、近い関係の人々の間に生じることがしばしばあった。それに加えて、PKI関係者を殺すことが、PKIでないことを証明し、殺害対象となることを逃れる方途となったので、身近な人を殺す立場、より多くは見殺しにする立場に追いやられることがあった。そのようなジレンマに立たされた人々は、苦渋に満ちた殺害や見殺しを行わざるを得ないことが多かったが、近い人を殺害から救った人々もいたという証言を報告している。

第8章の時間的焦点は虐殺期間の直後、空間的焦点はバリ州とジェンブラナ県という行政的括りに置かれている。中央でのスハルト政権の成立過程の一環として、バリ州においても、ジェンブラナ県においても、PKI虐殺に寄与したPNIのうちのスカルノ派の政治家たちが排除され、PNI全体が弱体化した。行政の長がスハルト派国軍メンバーに置き換えられ、スハルト強権が浸透するように、政党構造が改変された。また、バリ全体で食料や商品が欠乏し、PKIシンパの多かった教育界が極端な教師不足に悩まされ、虐殺の痛手は日常生活にも及んだことを示した。

終章である第9章は、「新体制」成立から現在にいたるまでの個人と共同体と国家の動態を相互に関連付けて振り返る。PKI嫌疑者とその家族は、国家によって政治犯のスティグマを負わされ、虐殺者とともに同じ共同体（バンジャル）で暮らさなければならないという、過酷な現実を生きたと

著者は推測する。一方で、バンジャルは自律性の高い共同体であるため、国家的スティグマから彼らの生活を保護する緩衝体となることもあった。スハルト政権が1998年に終焉を迎えてから、虐殺に対して反省の眼差しを投げかけることが可能になった。ワヒド第四代大統領のリーダーシップのもとに、虐殺の事実を究明する委員会が設立され、活動が推進されたが、様々な勢力の反対にあい、究明は頓挫した。その後、国家は虐殺の史実を忘却の淵へと送り込もうとしている。それに抗して、現代アート活動、虐殺された人々に対するバリヒンドゥー火葬儀礼などの活動がこれまで民間で行われてきた。しかしこれらは例外的であり、史実を不都合に思う政権に座る人々や加害者だけではなく、楽園イメージを核とする観光に依存せざるを得ない被害者たちも忘却に加担していると、著者は苦渋とともに締めくくっている。そして、読者を含めバリ観光をなんらかの形で享受している私たちも、忘却共謀者であるという言外のメッセージを響かせているように思える。

以上、分析を交えて2冊の著書の内容を紹介した。豊富な資料と史実を社会に伝えようとする熱意は圧倒的であり、研究者に、研究はいかにあるべきか考えさせずにはおかないだろう。著者には尊敬の念を禁じ得ないが、以下では、著者と評者の視点を対象化しながら、批評とコメントを述べる。

一点目は資料の取り扱いに関する。資料の取捨選択の基準、内容の真偽判断の根拠、記憶の問題などが明らかにされていないことや推論の恣意性が、論述の不透明さをまねいてないだろうか。『虐殺』は専門家が一般読者に語る、真相についての歴史／物語という形をとっているの、その都度データの出典が示されるわけではない。著者による推測も多く含まれているがその根拠が示されないことも少なくない。また、その根拠に疑問を感じさせる推測もある。例えば、マレーシア紛争への日本の仲介に内諾を示していたスカルノが突然拒否に転じた理由の説明の最初に置いている、「老練の政治家スカルノが、まさか本当に妻デヴィに関する報道ぶりに怒って川島との約束を翻したとは思えない」(『虐殺』p.20)という確信に満ちた推測である。この後に、「真相」としての中国の介

入についての推測が続く。研究の対象となり、著書に取り入れられるためには、資料は評価され取捨選択されなければならない。ある資料は額面通りの事実を示し、別の資料は額面とは異なる真相を隠しているという判断の基準、或いは、ある文書に資料的価値があるか否かという判断の根拠に、それ自体推測の域を出ない個人の資質などを置くことは妥当なのだろうか。そういう疑念が浮かぶと、多くの断定や推測の根拠が気になり、全体の歴史／物語が消化しにくいものになる。

バリにおける大量虐殺の真相解明を目的とする『楽園』の中心は、4章から7章にある。正当な報復として国軍やアンソールによるPKI関係者の虐殺が起こったという「通説」を検証する4章、国軍の陰謀を検証する6章には、著者の分析が期待されるが、資料の評価の基準が揺らいでいるようなところ、資料提示の整理が不十分であるところが目につけられ、分析は歯切れがよいとはいえない。例えば本書は概してアドナンの手記を真相を示すものとして引用しているが、4章では通説に適合し整然としていることを理由に偽であるという推測をしている。6章では、腹心の部下を殺された怒りが国軍の中隊長をして虐殺を行わせたという激情要因説を退け、国軍の陰謀が関係していたと推測を展開している(p.141)が、5章では、旧友を殺された軍人が狂気的な惨殺を繰り返したことについては、激情要因説に立っている(p.107)。

二点目は虐殺に関する普遍論的分析及び一般化に関するものである。『楽園』では「ひとは人を斯くも簡単に殺せるものなのか」という普遍的問いを掲げる。この問いを通して、20世紀以降、世界の多くの場所で見出される大量虐殺の諸事例を繋ぐ普遍的理論へと向かう可能性があるが、著者はその方向には向かわない。この問いを、ひとは人を簡単には殺せない、殺害者は内面に「奥深い苦悩」(p.166)を抱えている、というヒューマニスティックな反語的確信に置き換えている。それを踏まえ、何が彼らを殺害させたか、どのように見殺しにしたか、という問いの回答になる諸事例と、同じ条件でも虐殺しなかった、或いは、救済した、諸事例を、分析を加えず提示している。

豊富な資料がどのような論理的関係で並べられ

ているのかわからない部分も少なくなかったので、論理的関係を理解するために評者は、著者自身は行っていない、「カテゴリー化」「形式化」「合理化」などの用語を用いた抽象化による整理をした。この抽象化は、ナチスドイツの「合理的」なユダヤ人「処分」に照応させたものだ。パリでの殺害対象者に対する「割り当て」という用語の、殺害者たちによる使用とそれに伴う態度は、ナチスが、輸送中に排気ガス殺するよう整備されたガス・トラックに乗せたユダヤ人を「積み荷」と呼び「効率的な処分」を目指したこと〔細見 1996: 28〕と相似している。また、虐殺の場へと導かれる PKI 嫌疑者とユダヤ人たちの従順さ〔アーレント 2017〕が共通していることから一般論への扉は開かれているといえる。20 世紀における大量虐殺を比較する共同研究に参加し、その成果である『大量虐殺の社会史』〔松村・矢野 2007〕に寄稿した著者は虐殺について一般論を広範に把握していると思われる。そのうえでさらに、「ひとは人を……」と普遍の問いを発しながら、著者はなぜ一般論或いは普遍論的考察をまったく行わないのだろうか。

この問いに生産的な回答を与えるために、著者と評者のディシプリンの違いに関連付けて考察する。著者のディシプリンは実証的社会史であり、評者は(文化・社会)人類学である。人類学は、長期のフィールドワークによって得られた固有の社会の内側の経験を通した個別具体的な資料と、人間に関する普遍的抽象的理論を往還しながら研究を行う。普遍的抽象的理論化が重要視され、そのような理論化をもって、資料が理解され説明されたとすることが多い。人類学のこのような傾向ゆえに、記述や言述の内容の事実性を基本にするのではなく、全体性、構造、主観的経験からの理解を中心化する、アナール学派や記憶論などの社会史と人類学は親和性が高い。しかし矢野久が指摘するように、そのような社会史は、哲学的批判はできても、「社会的・歴史的現実の中核に位置する権力、とりわけ国家権力」のあり方を変える有効な知とはなりえない〔矢野 2007: 401〕。事実性を中心化する歴史研究こそが、虐殺された人々や国家権力によって不遇な状態に置かれた人々の尊厳を回復するのに貢献する可能性をもつ。その点

において、実証的歴史研究は裁判に類縁性を持つ〔同上書: 395; Ginzburg 1991〕。

この2冊の著書の目的は、PKI 殲滅の歴史に翻弄された名もなき人々の「二等国民」(『楽園』p. ix)の烙印を払拭するために、一般読者の記憶のなかに史実を刻み込むことであろう。したがって、一般論的枠づけや厳格な論理的整合性にこだわらずに、個別具体的な多くの証言や資料を提示しているのは、目的に適合している。どのような現実も論理的整合性をすり抜ける側面をもつので、論理的整合性を中心化することは重要なことをそぎ落としてしまうことにもなりかねない。著者にとっては、インドネシア史研究者が社会に向けて本を書くことは、一般論に跳躍するのではなく、インドネシア史の固有性と人々の証言のなかに、自らを置きつけることに他ならないのだろう。

三点目は人の生に関する。大虐殺に国家権力と国軍暴力が関与したことは間違いない。実証的社会史研究が、国民国家、国軍、政党、人間の尊厳、二等国民、ヒューマニティなどといった概念からなる近代的価値体系の水準で実証的歴史的真相を明らかにし、同じ水準にある国家の責任を迫及してゆくことの重要性はいうまでもない。しかし、人々にとって、生のリアリティと生きる意味の回復は、近代的価値体系の水準で歴史的真相を明らかにしていくことには還元されないだろう。

著者も指摘しているように、虐殺と PKI 関係者という不浄性(tidak bersih)は、理解を超えたものとして人々に降りかかった(『楽園』p. 209)。同じように理解を超えたものとして降りかかった水俣病の事例を見てみよう。患者たちは巡礼者の白装束でご詠歌を歌いチッソ株主総会に臨んだ。網元の家生まれ、父を急性劇症水俣病で失った緒方正人は訴訟の列を離脱し、代々行ってきたイオ(魚)を獲る営みを振り返り、石仏を彫るようになった〔緒方 2001〕。石牟礼道子は、土地の言葉に土地の内側からの声を響かせ作品を書いた〔石牟礼 2004〕。このように、裁判の勝訴や真相を示す実証的歴史には収まり切れない人々の生の回復を、近代的論理や価値体系とは異なる土俗的なものに向けて創発的に模索した。虐殺に巻き込まれたバリの当事者たちも、生の回復を、生を丸抱え

するような土着の方法のなかに模索してきたとしても不思議ではない。

バリは、オランダ植民地時代から現在に至るまで、実証的歴史学が把握する変容のなかで、様々な紛争や暴力を内包してきた〔Robinson 1995; 倉沢・吉原 2009〕。しかし一方、著者も指摘しているように、バリのバンジャルの自律性が国家的抑圧をかわし、バンジャル固有の営みを可能にすることもある。バリに限らず、人々は、国民国家からの影響を戦略的に流用しながら、自律性をもつ社会空間で生活を営む可能性をもっている。自律性の程度は様々であり、生活を方向づける文化様式は多様な交渉と創発性の上に成り立っている。人類学者は、そのような社会に長年くらしながら人々の生のリアリティを内側から捉えようとしてきた。著者も、バリだけでなくジャワ農村やジャカルタの庶民の居住地でフィールドワークを行ってきたが、その眼差しは一貫して実証的歴史研究のものであると思われる〔倉沢 2001 参照〕。著者は、これまで同様この2冊でも、歴史に翻弄された名もなき人々を描くことに力を注いでいる。歴史を記述するのに、近代的実証的眼差しにゆだねるのは、上で明らかにした著者の目的から妥当である。けれども、虐殺に巻き込まれた人々を描こうとする場合は、近代的実証的眼差しは多くのことを掬いそこねてしまう。とくに、バリのように生をまる抱えするような実践が日々繰り返されている自律的社会に根をもつ人々を描く場合は、そうであろう。例えば、「殺した側と殺された側の家族たちが同じ一つの村社会に……生きている。……にこやかに世間話をしており、村でお祭りがあれば、被害者の遺族たちも何の屈託もなく（そう見える）一緒に準備をし、お供えを捧げ、礼拝をする……私には想像を絶する世界だった」（『楽園』 pp. xv-xvi）と述べ、にこやかさや屈託なさを「真相」を隠す覆いのように見なしている。この瞬間著者は、バリの名もなき人々の生のリアリティを描く糸口を、自らの予断によって、手放しているように思える。著者自身7章で指摘しているように、近親や家族の殺害に間接的直接的に加担せざるを得ない場合もあり、遺族であり加害者である場合も少なくなかったのではないだろうか。また、にこやかで屈

託ない交流は、日常的権力関係にさらされながら、その社会固有の方法で模索した、人々の生の回復の創発的で暫定的な到達点なのかもしれない。それがどのようになされているか知るためには恐らく、聞き取りという方法ではなく、くらしを共有し人々が問わず語りするのを聞くのが望ましい。これは人類学にふさわしい仕事だ。実証的社会史と人類学がこの点で出会い協働することができるのではないだろうか。また、インドネシアという国民国家を研究領域として設定する場合、ジャワ、スマトラ、バリや大都市などに関心が集中しがちであるが、それ以外の地域で行われている人類学研究や地域研究がそういった偏りを是正する。著者の研究もそれらとの協働により、より豊かな成果をもたらすのではないだろうか。

（青木恵理子・龍谷大学社会学部）

参考文献

- アーレント, ハンナ. 2017. 『エルサレムのアイヒマン——悪の陳腐さについての報告』 大久保和郎 (訳). 東京: みすず書房.
- Ginzburg, Carlo. 1991. Checking the Evidence: The Judge and Historian. *Critical Inquiry* 18(1): 79-92.
- 細見和之. 1996. 『アドルノ——非同一性の哲学』 東京: 講談社.
- 石牟礼道子. 2004. 『苦海浄土——わが水俣病』 東京: 講談社.
- 倉沢愛子. 2001. 『ジャカルタ路地裏 (カンボン) フィールドノート』 東京: 中央公論新社.
- . 2014. 『9・30世界を震撼させた日——インドネシア政変の真相と波紋』 東京: 岩波書店.
- 倉沢愛子; 吉原直樹 (編). 2009. 『変わるバリ, 変わらないバリ』 東京: 勉誠出版.
- 松村高夫; 矢野 久 (編著). 2007. 『大量虐殺の社会史——戦慄の20世紀』 京都: ミネルヴァ書房.
- 緒方正人. 2001. 『チツソは私であった』 福岡: 葦書房.
- Robinson, Geoffrey. 1995. *The Dark Side of Paradise: Political Violence in Bali*. Ithaca and London: Cornell University Press.

矢野 久. 2007. 「終章 虐殺の研究とその克服」
『大量虐殺の社会史——戦慄の20世紀』松村
高夫；矢野久（編著），379-415 ページ所収.
京都：ミネルヴァ書房.

小西 鉄. 『新興国のビジネスと政治——
インドネシア バクリ・ファミリーの経済権
力』京都大学学術出版会, 2021, xi+305p.

民主化後のインドネシア政治をめぐって必ずと
いっていいほど言及されるのが、「寡頭制」（オリ
ガーキー）論である。すなわち、スハルト権威主
義体制下で権力に寄生して成長した一握りの政治
経済エリート（オリガーキ）が、1998年以降の民
主化・分権化の中で権力再編をめぐり抜け、権力
を握り続けているという議論である。本書は、ファ
ミリー・ビジネスとしてのバクリ・グループが展
開したビジネスや、グループを所有するアプリザ
ル・バクリの政治的行動の分析を通じて、この議
論に果敢に切り込んでいる。

インドネシアのファミリー・ビジネスは、華人
系企業グループとプリブミ（非華人）系企業グル
ープとに大別され、前者についてはスハルト体制期
に国家権力と癒着して巨大化し、後者についても
政府による庇護を受けてスハルト体制下で成長し
ていった。民主化した後は、両者ともに、政治権
力に近い位置にいるグループもあれば、政治とは
距離を置いてプロフェッショナルな経営に移行し
たグループもあり、その立ち位置は様々である（第
1～2章）。

バクリ・グループはプリブミ系で、政治に非常
に近い位置にいて大きく成長した企業グループの
一つである。スハルト体制下で国家の庇護を受け
ながら台頭し（第3～4章）、1997～98年のアジア
通貨危機を乗り越え、経営形態を刷新し、そして
2008年の世界金融危機も克服して、インドネシア
を代表する企業グループへと発展した（第5～7
章）。その過程でアプリザルは政治家へと転身し、
2004年に発足した第一次ユドヨノ政権では経済担
当調整大臣、2006年の内閣改造で国民福祉担当調
整大臣に就任し、2009年にはゴルカル党党首に選

ばれ、2012年にはゴルカル党における2014年大統
領選挙の候補者として選出され、大きな政治的影
響力を持った（第8～9章）。

寡頭制論に基づけば、アプリザルはスハルト体
制期から民主化期にかけて蓄えてきたその政治的
影響力を利用して自らのビジネス・グループに有
利な政策を採り、グループを危機や改革圧力から
救い、ビジネスを拡大していくことに成功したと
いう仮説があてはまるはずである（序章）。しかし
ながら、巨額の債務や改革圧力に直面して採った
バクリ・グループの決定や行動をつぶさに分析し
た本書は、新しく登用されたプロフェッショナル
な経営陣が国際金融市場で資金を調達し、それを
石炭事業に投入してビジネスを拡大させ、またビ
ジネス・ネットワークを生かした高リスクな資金
調達によって危機を乗り切ったことを明らかにし
た（第6～7章）。アプリザルは政治権力を握るこ
とにこだわり、経済担当調整大臣としての立場を
利用してファミリーのビジネスに有利な政策や利
益誘導を試みたが、それは財務大臣やテクノク
ラートによる抵抗に阻まれ、期待したような効果
を上げることはなかったという（第9章）。

スハルト体制期に台頭したバクリ・グループの
ようなオリガーキは、確かに民主化後も経済権力
を維持・拡大しているものの、それは政治的コネ
クションゆえというよりは、プロフェッショナル
な経営陣による合理的な意思決定によるもので
あったと本書は結論づける（終章）。スハルト体制
期に台頭したファミリー・ビジネスを権力との癒
着に依存した非合理的なビジネス・グループとし
て一枚岩に捉える寡頭制論とは異なる、新しい視
点を提供しており、この点にこそ本書の最も大き
な意義を見出すことができる。それを明らかにで
きたのは、とりもおさずバクリ・ファミリーを
支えてきたアプリザル本人やプロフェッショナル
な経営陣へのインタビューを含む、企業行動・意
思決定の緻密な分析ゆえであり、高く評価できる。

同時に、本書が明らかにしているのは、民主化
時代のインドネシアにおいて経済権力は政治権力
を持つための必要条件とはなるが、必ずしも十分
条件にはならないということである。政治的野心
のあるアプリザルは2004年大統領選挙でユドヨノ